

「ごちやまぜ」推奨な実験キャンパスで

総合政策学部 准教授

すきはら ゆみ
杉原由美

新型コロナウイルス感染拡大が大学教育に影響を与えて1年半以上が過ぎた。「SFCは慶應義塾の実験キャンパス」という文言を聞いたことがあるけれど、この1年半でますます実験の色彩が濃くなってきたように感じる。

研究会は、オンキャンパスとオンラインのハイフレックスで行っている。研究会の一つ「多言語多文化共生社会と日本語」は学部1年生から修士1年生まで参加。上海と台中在住の学生がいるのでオンライン参加は必然、学部1・2年生をはじめとする対面授業の渴望からオンキャンパス参加も必須。そこに他大学の大学院に進学したり企業に就職した卒業生たちもオンラインで加わっていて、ごちやまぜ感が増す。空間を超え、入学した時期も超えて月曜日4限に集い、4つのプロジェクトに取り組んでいる。

大学院の核であるアカデミックプロジェクト（AP）も同じくハイフレックス。複数教員で運営している「多言語多文化共生社会」APは、英語・日本語を軸として、複数話者のいる汉语（漢語）・台湾華語・ロシア語の使用も推奨している。つまり使用言語もごちやまぜ。

研究会もAPもごちやまぜだからこそ、担当教員の想像の範疇を超えた創造を生み出すように感じる。「SFCはごちやまぜ推奨な実験場のようだな」。こう考えてみて、私自身、学部生時代からごちやまぜを希求してきたことに気づいた。

卒業論文研究は南米出身日系人対象のフィールドワークで、ポルトガル語・スペイン語・日本語使用の言語教室がフィールドの一つだった。ここではブラジル人日系2世で広島大学大学院留学生のちえさんが先生で、生徒たちは、小学生から熟年世代までのポルトガル語話者とスペイン語話者、工場勤務のおじさまと大学生の私の日本語話者。ちえさんの「今日は雨について考えよう」などという語りかけから始まることばの教室は、多方向に「ごちやまぜで創造的で、私の研究と教育の原点だ。さて結論。SFCのあちこちで実験的なごちやまぜ状態が生じたこの1年半。きつと大きな創造に昇華されるはず。乞うご期待。」



オンキャンパスとオンライン参加者が交じって話し合っている研究会の一場面。内容に関心を持たれた方、研究会Webサイトをお訪ねください。



談話室

教員によるエッセイコーナー